
oblivious of giref

どうだ、明るいだろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

oblivious of grief

【Nコード】

N4887BA

【作者名】

どうだ、明るいだろう

【あらすじ】

『リ・アース』という異世界であらゆる記憶を失って目覚めた時田和希は、リアという少女と、メルテューレという女性が宿るプトマという剣と出会う。和希はリアのお母さんを探す為に、リアとメルテューレと当てのない旅に出る。そして、和希は様々な想いを抱き、様々な出会いを紡いでいく。これは正統派ファンタジーですか？

出会いと喪失

僕が目を覚ましたとき、雨音だけが響く廃墟の中で倒れていた。ひび割れた天井には割れた電球がぼつんとぶら下がっていた。

起き上がり、割れた窓から外を見ると、暗闇がひしめきあっていた。雨音がするが、暗過ぎて雨が降っているかは視認できない。室内が見えるのは瞳がそれくらいには暗順応しているからだろう。

木板の床に手をついて立ち上がると、ぎい、と木が軋む音がした。一歩踏み出すと、さらに木が軋む音が響く。

ふと、視線を感じ部屋の隅を目を凝らし見てみると、少女が足を抱えて座っていた。その少女は闇に紛れるような暗い服を着ており、すぐには闇と判別がつかなかった。

「……出て行くの？」

少女は雨音に紛れそうなか細い声で聞いてきた。僕は、少女が泣いているのではないかと思った。

「分からない。ここが何処かさえも分からないんだ。何をすればいいかも分からない」

僕は自分がどこにいるのか、自分が誰なのかも分からなかった。言葉を口に出して、初めて気づいた。

突然、自分のものとは思えないような嗚咽が自分の喉を震わせた。悲しくて切なくて、立っている事もできなくなった。膝をつき、両手を床に付き、涙で床を濡らした。

「な、何で、泣いてるんだ……」

涙の意味が分からなかった。ただ自分が誰なのか分からず、自分がどこにいるのか分からないだけじゃないか。ただそれだけでここまで悲しくなるものだろうか。

いや、僕は全てを失ったのだ。でもその全てが分からないのだ。悲しくなるものだろうか。

「私だって、泣きたいよ……」

いつの間にか、少女は僕の隣に立ち、僕の背中をさすってくれていた。

「ごめん、ごめん」

僕は少女の手から伝わる温もりにすがりながら泣いた。しばらくの間、何も考えずに泣いた。泣くしかなかった。泣く事しか許されていなかった。

やっと、涙が引いたとき、嗚咽も止んだ。泣いた事で酷く憔悴していることに気づいた。

「大丈夫？」

少女の声が聞こえて、僕の側に少女がいることも忘れていたことに気づいた。自分の内側に酷く籠っていたのを恥じながら、僕は顔を上げた。

「ありがとう。君は？」

暗闇の中見る少女の表情はとても悲しげで、儚げに見えた。すぐにどこかに消えてしまいそうな印象さえあった。

「リア・オプスキュルテ。あなたは」

「分からない。何か自分の名前だと分かるものがあればいいんだけど」

僕はそう言いながら、ポケットに固い箱状の物が入っていることに気づいた。それは携帯電話だった。

確か携帯電話には個人情報があったはず。それを思い出し、電源を付ける。携帯電話の使い方を覚えている事に驚きを感じながら、所有者情報を確認した。そこには時田和希と書かれていた。

これが自分の名前か。一応、しっくりくる。

「多分、時田和希」

「トキタカズキ？ 極東リグドニアの出身なの？」

「リグドニア？ それってどこなのかな？」

少女は考える素振りを見せるが、すぐに止めてしまった。

「記憶喪失……かな。都市伝説かと思ってた」

記憶喪失。簡単に言えば、そういうことになる。自分が誰かも分

からず、ここがどこかも分からない。そして、自分が何者かも分からない。

「出発するなら、朝がいいと思うの。人間は夜目がきかないし、危ないから」

「危ない？」

「そう。魔物がこの里の中にもやってくるようになったの」

魔物？

「魔物が分からないの？」

リアは怪訝そうに僕を見る。僕は一体どんな顔をしていたのだろう。僕こそ、怪訝な顔をしていたと思う。魔物なんて言葉はゲームぐらいでしか聞いた事がない。例えば。

「スライム？」

「そういうのはこの辺境にはいない。ここにいるのはオークとかワールフとかそういう魔物」

オーク。ワールフ。一体、何の話をしているのだろう。ゲームの話をしているわけではなさそうなのだけれど。

「やつつけられないの？」

「私一人なら。だけど、カズキ一人なら間違いなくやられちゃう」

「リアが大丈夫なら、僕にも大丈夫なような気がするけど」

「私は特別だから」

僕は相づちを打ちながら、壁際に座った。リアも僕の隣に腰を下ろした。

「特別ってどうして」

「私はダーク族の間でも、夜の姫君と呼ばれる存在なの。夜の間なら、何者にも負けない力を発揮できる」

「ん？ まず、ダーク族ってのは？」

「そこから話さないと駄目なの？」

リアは呆れていた。僕の中にある常識とこの世界の常識がさきほどから食い違っている。これはどういうことなのだろう。

「ダーク族って言うのは、夜に生きる種族。夜の間は圧倒的な力を

誇ることができるから、出稼ぎに出てるダーク族は暗殺部隊とかで活躍してるの」

「そういう種族がいるのか。不便じゃないのか？ 夜に生きるってことは、昼に襲われたりするかもしれないじゃないか」

「そういう危険もあるけど、ダーク族を知っている者は普通手を出さない。報復を恐れるから」

「やられたらやり返すって信念なのか。へえ。ダーク族ってのは分かったけど、夜の姫君ってのは？」

「夜の姫君ってのは、ダーク族の女王から生まれる娘のこと。代々引き継がれてる家系なの」

「へえ。そういえば、お母さんとかお父さんは？」

僕は何気なく家系という言葉から、父母の存在を確認した。その瞬間、リアの様子がおかしくなった。

唇を噛み締め、手を強く握って、小さく震えていた。僕はどうすればいいか迷ったが、咄嗟にリアを抱き寄せていた。

リアは今にも泣きだしそうだったのだ。こうするのが最善だと思った。

「ごめん。聞かない方が良かったね」

「いいの……いいの」

リアの声は震えていた。恐らく、お母さんとお父さんは亡くなったのだろう。この廃墟からも察するように、何か強大な力によって

「お母さんは、この里を壊したの」

そう、何か強大な力によって。

「……え」

それはリアのお母さん。ダーク族の女王と呼ばれる人。

「お父さんはお母さんを止めようとして」

「分かった。もういい」

僕はリアの小さな体を抱きしめ続けた。今にも消え入りそうな儚い表情。それは間違いではなかった。リアの安らげる場所はここにはもうなくなってしまうていたのだ。この場所に留まる理由なんて

なかったんだ。

「リア。一緒に行こう」

「どこに？」

「さあ。だけど、ここにいるよりはましだろ」

そうだ。こんな終わった場所にいつまでも固執する必要がどこにある。

「でも」

そうだ。未練があるだろ。何年もこの里で生きてきたのだ。ただ、それはきつと、リアには良くない気がする。

「お母さんは生きてるんだろ。探しに行こう」

「駄目。お母さんは今度こそ、私を殺す」

「僕が守ってやる」

「ただの人間がダーク族に敵うはずがない」

「それは……」

里を一つ壊滅させるほどの力を持つダーク族の女王。敵うはずがないのは分かりきっている。こんな丸腰の人間が敵うはずがないんだ。

力が欲しい。

どんなものにも負けない力が欲しい。

どんなものも守れる力が欲しい。

そう願っても、力が手に入るはずがない。

「ね。人間は朝にさっさとこの里を去った方が身のため」

諦められない。でも、どうすれば。

『なら私と契約を結びなさい、和希』

「……誰？」

リアは周囲を睨みつける。

どこからともなく声がした。僕はリアから視線を外し、周りを見回した。そういえば、レンガ作りのこの建物は、一体。今までどこかの民家が廃墟と化しているのかと思っていたが、にしてはそうには見えない荘厳さが隠れている。

「リア、ここは家なのか」

「……ここはダーク族の里、ルアの神殿」

「そうか。だから、この中には魔物が入ってこないのか。とすると、寄せ付けない何かがあるはず」

「駄目」

奥に進もうと立ち上がる僕の裾をリアが捕まえる。

「危険なの」

「何で危険なんだ」

「何でって。触れたものは絶対死ぬって言われてるから」

「実際に死んだ人は」

「いっぱい」

僕に話しかけてきた見知らぬ声。恐らく、それなんだろう。いわくつきのものこそ、何か得体の知れないものが宿っていてもおかしくない。

「リアは触れなくていいから」

「カズキが死んじゃう」

「大丈夫」

『リアの言葉を聞いても、私を恐れない貴方の勇氣。それは無謀とも言えるでしょう』

「だろうな」

また声が聞こえる。声は奥から聞こえる。今度は声に方向性を感じた。

「行こう、リア」

「駄目だよ」

リアも声の主が何かが分かっているようだった。表情には恐怖に似た怯えたものが張り付いていた。奥にあるものとはよほど恐ろしいものなのだろう。それはあまりにも神聖なものなのか。それとも邪悪なものなのか。

僕はリアが止めるのを聞かずに、奥に向けて歩き出した。リアは僕にしがみついて止めようとする。

『契約内容はただ一つ』

奥に近づく事で、声は確固たるものになる。

『あなたの正義を貫く事。それが破られたとき』

僕は一つの剣の前で立ち止まった。そこだけ岩で出来た床が広がっていた。剣は岩に刺さって立っていた。

『和希、あなたの命をいただきます』

剣は一見、どこにでもあるようなものと変わりがなかった。ただ、切れ味だけは鈍く光る刀身からも察する事ができた。

「見返りがないじゃないか」

僕は剣から声が發されていることを自然と理解していた。それが当たり前のようにも感じた。

『何者にも負けない力を授けましょう』

信じられるか。いや、信じるしかないだろう。

僕には頼れるものもないし、失うものもない。ただ、目の前にいるリアという少女を守ることだけが今の僕にある想いだ。

「契約成立だ」

僕は剣を引き抜いた。その瞬間、目も眩むほどの強烈な光が剣から發された。驚いているうちに、光は収束し、僕の体に吸い込まれていった。

「っ！」

剣を握った右手の甲に一瞬激痛が走った。そこを見ると、淡く光る刻印が浮かび上がっていた。僕には理解できない何かの模様が、脈を打ち始める。

「これは」

今更になって取り返しのつかない事になったのではないかという危惧が生まれたが、不思議と後悔はなかった。これが自分にしつくりとくる運命のような気がしたのだ。

「その刻印は私との契約の印です。下ろしてください」

言われた通り、剣を冷たい岩の床に置いた。すると、剣は淡く光り姿を変えた。

僕は驚きで身を引いてしまった。そこに現れたのは一人の女性だったのだ。精悍な顔つきで、恭しく頭を下げた。

「お初にお目にかかります、マスター。私はメルテューレ・クロツク。かつて三大神に仕えていた英雄であり、時を司る神でもあった者です」

「メ、メルテューレ……！」

僕にいつまでもしがみついているリアが初めて口を開いた。驚愕で目を見開いていた。

「リア、メルテューレってのは凄い人なのか？」

「カオス時代の世界を統一した唯一英雄だよ！ 何で英雄がこんな所にいるの！」

「それはですね」

メルテューレはリアと視線を合わせる為に中腰になった。

「私にもよく分からないのですが、恐らくこの愛剣プトマが聖遺物として力を持ってしまったので、私の意識が吸収されてしまったのではないかと考えています」

「なんで、そんなものがルアの里にあったの？」

リアはメルテューレ相手に畏怖を感じているようだった。それほどに、偉大な相手だということだろうか。

「それは私にも分かりかねます。分かる事は、私はマスターを待っていた、ということだけです」

「僕を？」

リアと、メルテューレの視線が僕に向けられる。

メルテューレは口を開く。

「マスターは特別な運命の下にこの神殿に導かれたのだと思われる。す。」

「わけが分からないな」

僕は首を傾げながら、ふうむ、と唸った。

「神の啓示のようなものです。これは人智を越えた運命なのです。神の戯れとも言えいいでしょう」

メルテューレは腰を伸ばすと、剣の姿に戻った。粗雑に剣は床に倒れた。

「マスターは私をお使いになってください。力は想いです。それをお忘れにならないでください」

「力は想い？」

僕はメルテューレの化身であるプトマと呼ばれた剣を手にした。すると、右手の刻印が淡く光る。

「強い想いがあなたを強くするのです」

僕は隣にいるリアを見た。リアを守る。今の僕にはそんな想いしかない。この想いはどこにでもあるようなありふれたものかもしれないけれど。

「では参りましょう、マスター。リアさんと共に移動するなら夜の方が得策です。エイダ地方の僻地にいる魔物は確かに強力です。しかし、マスターのリアさんに対する想いがあれば切り抜けられるはずです」

「ああ。行こう、リア」

「そんな剣一本でどうにかなる魔物じゃない！」

リアは僕の服の裾を強く握る。

「大丈夫。リアのお母さんに会うまでは死んだりしないよ。それに、夜の間はリアが守ってくれるだろ」

「えっと……」

リアが返答に窮した。視線を反らす。

「出会ったばかりの僕を信用しろっていうのは無理かもしれない。

だから、信じてもらえるように僕はリアを信じるよ」

なんだか支離滅裂とした答えだった気がしなくもないが、僕はリアをこの里から連れ出さなければならぬ。

リアは僕の心配をして出発を渋ってくれているのだ。

……いや、違う。

リアの反らす瞳を見て気づいてしまった。あまりにも鈍かった。

リアはこの里を出るのを嫌がっているのだ。僕の心配なんかして

いるわけがないじゃないか。朝になつてから出発すればいいと言つたが、ここはメルテューレに言わせれば強力な魔物がいる僻地なのだろう。

朝出発しても、大丈夫な保証なんてないじゃないか。

じゃあ、何故、夜に出発する事を拒んだのか。それは、自分が守らなければならない、責任が生じるからだ。命というものに対する責任だ。

そうだよ。出会つたばかりの僕にどんな感情移入をしてくれてると言つのだ。こんな少女がだ。

駄目だな。自分の都合のいいように解釈ばかりして。

本当に駄目だよ。

僕はそれでも、この少女を終わつた場所から連れ出さなければならぬんだから。

独りよがりの偽善かもしれない。でも、これが僕の信じた想いなんだ。これがリアの為になるという独善的な想いなんだ。

これが僕の正義なんだ。

「リア。お母さんから守るだけじゃない。君を傷つけるあらゆるものから、僕は君を守つてみせる。だから、行こう」

どんどん言葉を重ねる毎に言葉の重みが軽くなっていくような気がする。でも、言葉にしないと、リアには伝わらない。僕たちの間には何も無いのだから。

「……分かった」

リアは頷いた。その様は、僕を信用しての決意のように見えたが、違ふのだろう。この少女は自分の想いを隠す術を分かっている。

「行こう」

僕はリアの手を握つた。

「危ないから」

リアは僕の手を振りほどいた。

「そうだな」

僕はそれ以上、何も言わなかった。

確かに、これから魔物と対峙するといふのに手なんか繋いでいても足手まといになるだけだ。

プトマを両手で強く握り、僕とリアは神殿を出た。そこには僕知らない世界が広がっていた。

闇の荒野

そこに広がっていた世界は、荒涼としていて枯れた木と廃墟がいくつかが散見されるだけだった。

空は雨雲に覆われていて、闇が周辺を覆っていた。神殿の外は雨が降っている。地面を見ると大分ぬかるんでいる。

ふと、近くにある廃墟から人影が現れたのに気づいた。その人影を見て、僕は息を飲んだ。

それは人とは呼んではいけない化け物だった。醜悪な容貌はこちらを向いていた。間違いなく、僕たちを見ている。

「あれはゴブリン。雨だからオーク達は出てきてないみたい」

「とにかく走り抜けよう。刺激を与えるのは良くない」

僕は剣を落とさないように両手で持ち、リアと視線を合わせてから前を向いた。

「行くよ！」

「はい！」

お互いに声を掛け合ってから駆け出した。

ぬかるんだ地面は走るには不向きだったが、それはゴブリンにも同じだったようだ。後ろの方から、地面に倒れる音が聞こえてきた。リアは僕と並走しているから、リアのものではない。間違いなく追ってきたゴブリンのものだろう。

全力で走りつづけた。里の入り口と思われるアーチもくぐった。

リアは一瞬駆ける足を緩めたが、すぐに早めた。やはり、未練があるのだ。

そろそろ体力的に限界が近づいてきたところで、僕は足を止めた。一緒にリアも足を止めた。

「ゴブリンは仲間意識が強いですから、倒さなくて正解でした」

メルテューレが喋る。話す兆しがないので、いちいち驚いてしま

「そうなのか。いや、ゴブリン一体しかいないとは思えなかったからな。あそこは逃げるのがいいと思っただけなんだが」

僕は息を切らしながら言う。

「良い判断力です。では、ここから一番近い里を目指しましょう。そこで今後の事を話し合いましょう」

「じゃあ、シミュラの里かな」

リアは全く息を切らしていなかった。これが夜の姫君の力なのか。シミュラの里か。リア、案内してくれるか」

「うん」

リアは頷くと、周りを見回した。後ろを振り向くと、闇に紛れてルアの里はもう見えなくなっていた。リアも後ろを見ていたが、すぐに前を向いた。

「こっち」

リアは方向が分かったのかさっさと歩き出してしまった。僕はその後ろについていくように歩き出した。

「途中に里が見えるけど迂回してその先にある里に行くの。明け方にはつくと思う」

「どうして途中の里に寄らないの」

「そこは余所者には厳しいから」

「何て名前の里ですか」

突然、メルテューレが口を挟んだ。

「ミライ」

「まだあつたんですね。ミライには独特な回復術が伝わっているはずです。それ故に、余所者を受け付けなかったと覚えています」

「歴史のある里なのか」僕は言う。

「閉鎖的な場所はいつかは滅びると私は忠告したのですが」

カオス時代に活躍していた英雄が言うのだから、よほど昔なのだろう。しかし、何年前の話なのか分からない。いい機会だから聞いてみようか。

「カオス時代ってのはいつの話なんだ」

「私には分かりかねます。リアさんなら分かるのではないでしようか」

「大体二千年前って言われてる」

リアは前から視線を反らさずに歩いている。僕はそんなリアの表情を隣で見ていた。毅然とした表情をしているが、果たして本心はいかほどなものか。

まあ、そんなこと気にする必要はないだろう。例え、嫌われていようとも僕はリアと一緒にいるのだから。

「しかし、二千年前か。二千年前の英雄がここにいるのだから、この世界は何が起きてても不思議じゃなさそうだな」

「マスター。この世界は不思議で溢れています」

「メルテューレがそう思うのなら、そうなのかもな。僕にはまだよく分からないけど」

「マスターもいずれ分かることです」

それだけ話して、僕たちは口を開く事はなかった。リアはただ前だけを睨むように見つめていた。僕はそんなリアの表情を少し不安になりながらも眺めていた。

リアは幼いはずなのに、どこか大人びている。その年齢相応に振る舞えない何かが、僕を不安にさせる原因でもあった。

歩き疲れてきた頃、里が見えてきた。リアを見ると、僕に対して首を振って答えてみせた。あれが、ミライという里らしい。あそこは僕たちにとって関わりのない里だ。

どんな里か多少の興味はあったが、面倒は今回避けなければならぬ。僕たちにはとにかく、落ち着ける場所が必要なのだ。面倒を抱えた場所はいらない。

僕とリアはミライの里を後方にし、次の里を目指した。

しかし、歩き疲れた。リアを見るが疲れた様子はない。夜の間はリアは本当に無敵なのだろうか。この調子が続くのだとすると信憑性がある。

明け方にはシミュラの里にはつきたいので、休憩は挟まないよう

にしたい。それはリアも同じだと思う。

とそんなことを歩く事に専念しながら考えていた時だった。

リアは足を止め、雨で視界が効かない景色を見つめていた。僕はリアが見つめる方向を見てみたが、何も見えない。

「オークがいる」

リアはそれだけ言うと、服の裾を捲り上げ、足から二本のナイフを取り出した。

「オークは仲間意識が薄い魔物です。ここらで力を示しておく必要もあります」

メルテューレは言う。僕はそれを聞いて息を飲んだ。

とうとう戦うことになるのか。僕は自分の手が震えている事に気づいた。

実のところ、手の震えは今が初めてではなかった。ゴブリンを見たときにも手は震えていた。神殿を出て、全速力で駆け出したのは怖かった。ただそれだけに尽きるのだ。

「カズキ。他の魔物が戦いの音に気づいて近寄ってくるかもしれない。その時は引き付けて私が駆けつけるまで待つて」

そうリアは言うと、闇の中に駆け出してしまった。ダーク族は闇が良く見通せるのかもしれない。

「マスター、リアさんは大丈夫でしょう。私たちは先ほどから近くで聞こえる足音に警戒しましょう。恐らく、私たちを監視しているでしょう」

僕は咄嗟に周りを見回した。しかし、雨と闇で視界が悪い。誰かが潜んでいても、僕には分かりそうにない。

そう遠くない場所から、醜悪な苦鳴が聞こえる。恐らく、オークのものだろう。リアはオークと戦っているのだ。

僕はすぐに周りへの警戒を始めた。といっても、何かできるわけではない。震える手で、強くプトマを握ることしかできない。

雨の音と、リアが戦っている音だけが聞こえる。メルテューレの言う足音などしない。

足音がしないことに僕は焦りだしてしまふ。
咄嗟に後ろを振り向いたりするが誰もいない。
気配はするのに、誰もいない。

まるで、自意識過剰、なんじゃないか、と。

見えない敵。

姿を見せない敵。

それは一体、何なんだ。

「マスター、大丈夫ですか」

突然、メルテューレが言った。僕は自分が酷く息を切らしている事に気づいた。

僕は呼吸を整え、再びプトマを握り直した。その時だった。

視界の隅に人影を見た。僕は咄嗟にそっちを向き、プトマを構えた。

そこにはルアの神殿で見た魔物、ゴブリンだった。

僕は足が震えていることに気づいた。

いや、全身で震えている。寒い。

ゴブリンがこちらに近づいてくる。逃げなきゃ。ゴブリンは仲間意識が強い魔物。一体を倒すと後が面倒なのは分かりきっている。

だけど、僕は興奮していた。その足はゴブリンに向けて駆け出し、プトマを振り上げていた。

ゴブリンは手に持っていた棍棒でプトマを受けようとする。しかし、プトマは棍棒を一刀両断した。

プトマを振り下ろした。ゴブリンには届いていなかったが、ゴブリンの戦意喪失を削ぐには効果的だった。

ゴブリンは逃げ出そうと背中を見せる。僕はそれをぼんやりと見ていた。突然、銃声が響いたと思ったら、ゴブリンが弾かれるように横に倒れた。

「マスター、気をつけてください」

僕は深く息を吐きながら、銃声がしたほうを睨みつけた。そこには、一人の男が立っていた。背中に大剣を背負って、片手には銃を

握っていた。

「よ」

男は軽々しく手を振ってみせた。僕は呆氣にとられてしまった。
「にいちちゃん、助けてやったんだ。ありがたく思いなよ」

男はそう言くと、笑ってみせた。僕はプトマを握る手を緩めて、軽く頭を下げた。

「で、こんな夜中に一人で何をしてるんだ、こんな辺境で」

男は回りを気にしながら近づいてくる。

「シミュラの里まで行こうかと」

「シミュラか。あの里に何の用があるんだ」

「用、というかとにかく落ち着ける場所を探してて」

「ふうん。俺もそっちの方に用があったし、付き合ってやるよ。俺はアルフォード・リック。傭兵をしている」

「僕は時田和希」

「なんだ、変わった名前だな。トキタカズキ、ね。で、その隣にいるお嬢ちゃん、どなただい」

「うわっ」

いつの間にか、隣にリアが立っていた。頬には緑の液体を浴びていた。オークの血、だろうか。

「カズキ、誰、この人」

「ああ、この人はアルフォード・リック。さっき、僕を助けてくれたんだ」

「どうも、アルフォードだ。傭兵してる」

「ふうん」

アルフォードの言葉にリアは怪訝な瞳を向けたが、すぐに歩き出してしまった。

「カズキ、行こう」

「あ、ああ」

僕は慌ててリアの背中を追いかけた。

「置いてくなくて」

アルフォードに後ろからくっつかれた。僕は苦笑を浮かべながら、アルフォードを体から離れた。雨の中、濡れた体がくっつくのはあまり気分がいいものではない。

「何、この男もついてくるの」

リアは立ち止まり、不機嫌そうに言う。

「何、駄目なん、お嬢ちゃん。俺もシミュラがある方に用があるんだ」

「……それなら」

リアはぶいっと前を向いて歩き出してしまった。アルフォードはぴゅゅつと愉快そうに口笛を吹く。僕は騒がしいのが増えたと思った。

そういえば、メルテューレの言っていた僕たちを監視していた者とは誰だったのだろう。さっきのゴブリンだったのだろうか。それとも、このアルフォードか。まあ、アルフォードはないだろう。監視するだけなら、僕たちに関わる理由がないだろう。

「で、カズキ君とやら」

「ん、なに」

アルフォードは歩きながら口を開く。

「君はどこ出身なんだい。俺はアイギス王国なんだ」

「アイギス王国？ それって」

「ファールンツェにある王国だよ。そんなことも知らないのかい」
べたべたとアルフォードはくっついてくる。だから、雨の中でべたべたしないでもらいたいのだが。

「僕は記憶喪失で、どこからやってきたのかとか分からないんだ」

「は？ 嘘だろ、記憶喪失って。名前は覚えてるじゃねえか」

「名前は携帯電話にそう登録してあったから」

「携帯電話？」

今度はアルフォードが疑問を呈する番だった。僕はポケットから携帯電話を取り出してアルフォードに見せた。アルフォードは目を丸くして、それを見た。

「機械だな。携帯電話つてのは何に使うんだ」

「そんなことも知らないの？」

「おいおい、カズキ君。アイギス王国を知らない君には言われたくないね」

「ふむ」

アルフォードとも僕の常識と噛み合ない。もしかしたら、僕はとてつもない出来事に巻き込まれているのではないか。

「この携帯電話つてのは、同じこれを持っている人とどこにいても会話ができるんだ。ただ、電波が届く場所じゃないと使えないんだ。ここじゃ使えないみたいだね」

僕は携帯電話を開いて、電波の状況を見た。見事に圏外と書かれていた。

「電波つてのは何なんだ。マナみたいなものか？」

「うーん。マナつてのが分からないけど、多分違うと思う。基地局つてのがあつて、そことどれくらい繋がっているか、って感じかな。間違ってるかもしれない。僕は携帯電話にはそこまで詳しくないから」

「カズキ君。それってオーバーテクノロジーじゃないのか。基地局つてのがまず、この世界には存在しないと思うぜ」

「……だとすると、僕は何でこんなものを持つてるんだ？」

「幾つか可能性があるぜ」

アルフォードは僕の体から離れた。そして、僕の肩に手を置いた。「一つは、記憶を失う前にどこかで手に入れたって線だな。でも、こんなオーバーテクノロジーがこの世界にある理由にはならない。だから二つ目、カズキ君が未来から来たか、異世界から来たか、その線だな」

「やっぱり、その可能性があるのか」

「そ。でも、これ以上は絞れないぜ。もしかしたら、カズキ君を知っている人がこの世界にいるかもしれない。そしたら、前者の可能性に絞れるけどな」

「そうか……そうか」

自分が何者なのか、結局、携帯電話だけでは分からないが、可能性だけは絞れた。少し気が楽になった気がするし、余計に焦らされているような気持ちにもなる。

僕が黙り込むと、アルフォードも喋らなくなってしまった。リアは相変わらず前を向いたまま歩いている。

しかし、しばらくするとアルフォードが軽快な口笛を吹き始めた。すると、リアがアルフォードを睨んだ。

「ちょっと」

「ん、何だ、お嬢ちゃん」

「魔物に気づかれる」

「お、悪いな」

アルフォードは悪びれた様子はなく片手を上げて愉快そうに答える。リアはそれを不愉快そうに睨む。

すぐにリアは歩き出してしまった。それ以来、本当に音はぬかるんだ地面を踏む足音と雨音だけになった。僕は疲れきってしまい、雨音も足音も気にならなくなっていた。

リアは相変わらず疲れた様子を見せない。アルフォードに関しても同様で、傭兵なんてやってるぐらいだから、体力があるのだろう。僕が息を切らし始めた頃、雨が小雨に変わっていた。わずかだが雲間が生じているようだった。景色が瑣末だが、見通せるようになった気がした。

すると、遠くの方に里が見えてきた。それと同時に地面もよく見通せるようになったのだが、道と言う道がない、荒涼とした荒野を歩いているだけだった。リアがいなければここまで辿り着けたか分からないぐらいだ。

足が痛くなってきた頃に、シミュラの里についた。空を見上げると、夜明けを迎えていた。リアの言う通りだった。リアはこの土地について詳しいのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4887ba/>

oblivious of giref

2012年1月14日15時48分発行